

卒業論文作成における教育的意義について

— 学生の自尊感情と教員による期待 —

児玉恵美

Educational significance in writing a graduation thesis:
Students' self-esteem and teachers' expectations

Emi KODAMA

本研究では、1) 卒業論文を提出し終わったばかりの大学生の卒業論文作成に対する認識と、その自尊感情との関連を調査し、2) 卒業論文作成について、学生と卒業論文を指導する教員の考え方の相違を探索的に検討した。結果、学生は卒業論文作成を重大なものと認識していることが示された。そして、卒業論文作成過程におけるストレス度が自尊感情と負の相関を示し、卒業論文作成状況に対する肯定的な認知が自尊感情と正の相関を示していた。また卒業論文作成について、多くの学生がそれを肯定的な体験と意味付け、研究の実施や新しい知識の獲得を楽しみ、周囲の人との関わりを学んでいることがわかった。一方教員は学生に、研究に対する姿勢や、諦めずやり遂げる精神などを期待していた。そして卒業論文作成について、学生・教員ともに、達成感を得て自己成長できる体験だと捉えていることが示唆され、これらが卒業論文作成の教育的意義の大事な一側面を表していると考えられた。

キーワード：卒業論文作成，教育的意義，自尊感情

問題と目的

筆者が所属する大学では、大学3年生の後期から卒業研究のためのゼミが開始される。そのため、学生は約一年半を掛けて卒業論文作成に取り組むことになり、卒業論文を提出することが大学卒業の必須条件となっている。学生にとって、これまで抱えてきた疑問や問題意識を、大学四年間で学んできた知識や経験を活用することにより明らかにしてゆく過程は、学生生活の集大成として大きな意義のあることであろう。

実際、大学生にとって卒業論文の作成はどのように体験されているのだろうか。水間(2006)は心理学専攻の女子大学生へのインタビューから、学生が自身の学習過程を肯定的にみなした根拠について、卒業論文を頑張ったことに言及する者が多かったことを示している。また、尾崎・松島(2006)は大学生の授業意欲について調査を行い、大学2年生の後期には卒業論文への意識、3年生から4年生においては卒業論文への着手が、意欲上昇要因の一つとなることを示している。そして

吉良・田中・福留(2007)は、学生相談を利用した学生について大学生活に特徴的な問題をまとめ、大学院生に非常に多くみられる「研究の悩み」と「教員との関係」の問題が、一部の大学4年生に副次的問題として表れていることについて、卒業論文作成などをめぐり生じた問題だろうと述べている。

これまで、大学生の学びや悩みに関する研究の中で卒業論文について触れられることはあっても、卒業論文への取り組み自体について直接取り扱った研究は数少ない。その中で橋本(2011)は、卒業論文作成を大学生にとって重大なストレスフルイベントの一つとして取り上げ、自己および卒業論文作成に対してポジティブな認知をしている者は抑うつが低いことを示している。さらに、大学4年生を対象に夏休み前と卒業論文提出期限1ヶ月前の時点を取り上げ調査し、卒業論文提出に関して、期限や進捗状況に対する意識が12月になると強まり、それらが抑うつとも関連していること、卒業論文作成に伴う楽しさと苦しさは表裏一体で

あることなどを明らかにしている(橋本, 2011)。卒業論文作成について、橋本(2011)は抑うつとの関連を調査しているが、学習意欲を高め、学習過程を肯定的に受け止める要因ともなっていることを考慮すると、それに関係する肯定的な感情との関連についても検討する必要があるだろう。そこで本研究では、自身に対する肯定的な感情として自尊感情に注目する。

自尊感情(self-esteem)とは、自分自身を尊敬し、自分を価値ある人間だと思うことである(Rosenberg, 1965)。ここでRosenberg(1965)は、自尊感情の2つの異なる意味について、一つは自己に対して「非常によい(very good)」と考えること、もう一つは自己に対して「これでよい(good enough)」と考えることだと指摘している。そして、Rosenberg(1965)が主張するところの自尊感情の高さは、自分なりに満足して「これでよい」と感じることを意味する。これまでに大学生を対象とした自尊感情に関する研究として、たとえば田澤・梅崎(2011)は大学1年生を対象に調査を行い、前期に友人を作ることが1年生終了時の自尊感情に正の影響を与えることなどを明らかにしている。また外山・桜井(1998)は、自尊感情がストレス反応を軽減させることを示している。卒業論文の作成においては、多くの学生が、研究したいことと実際に研究できること、指導教員の要求することと自分に取り組めることとの間で多少なりの挫折や妥協を経験している。そしてそれらの経験を通して、最終的には自分なりに「これでよい」と折り合いを付けて論文を完成させてゆくことになる。したがってその意味においても、卒業論文作成の過程には自尊感情が関わっていることが考えられる。

他方また異なる視点として、卒業論文の作成過程は、それを指導する教員にとっても重要な意味を持つ。担当学生の数にもよるが、教員は正規の授業枠を超えて卒業論文の指導に追われることもあり、そこでは多くの時間と労力が費やされる。そして、教員も学生と同様に、学生が希望することと研究実施の可能性、教員の考える指導方法などとの間でいかに折り合いをつけてゆけばよいのかと対応に苦慮することがある。学生は、卒業論文作成を通して、何を学び、体験しているのだら

うか。一方で教員は、卒業論文作成を通して、学生にどのような学びや体験を期待しているのだろうか。さらに、教員の考えは、学生のそれとどの程度の一致や不一致を示すのだろうか。それらが明らかになると、卒業論文作成の作業が、両者にとってより有意義なものになると考える。

以上より本研究では、学生・教員の両者から捉えた卒業論文作成における教育的意義を検討することを目的とする。まず調査1で大学4年生を対象として、学生が卒業論文作成についてどのような認識を持っているのか調査し、併せて自尊感情との関連を見る。橋本(2011)は、卒業論文作成をストレスフルなイベントと捉え、夏休みの時期と、もっとも抑うつが高まりやすいと考えられる提出直前の時期に調査を行っている。本研究では、学生が、自らの卒業論文作成の全体をどのように捉えているのかを把握するために、卒業論文の作成を終了し提出した直後の学生を対象とする。さらに調査2で、卒業論文の指導教員を対象として、教員は、学生が卒業論文作成をどのように捉えていると考えているのか、また学生に卒業論文作成を通してどのような学びや体験を期待しているのかを調査する。なお、学生と教員の考えを比較するために、後に示す結果と考察は、調査1と調査2を併せて記載する。

調査1

目的

卒業論文を提出し終わったばかりの大学4年生が、卒業論文作成について、どの程度の重要性、深刻性、ストレスを与えるものと考えているのかを調査する。また、卒業論文作成をどの程度肯定的に認識し、卒業論文作成の何が楽しくて何が苦しかったのか、苦しいときどのように対処したのか、卒業論文制作から何を学び、どのような体験と認識しているのかを調査する。同時に、自尊感情の程度についても調査する。

方法

対象者：大学4年生35名(平均年齢21.94歳, $SD=0.59$)。そのうち男性8名(平均年齢22.25歳, $SD=0.89$)、女性27名(平均年齢21.85歳, $SD=0.46$)。

調査時期：2012年12月18日～20日

調査手続き：卒業論文を作成し、提出を終えた直後の心理学を専攻する大学4年生に貼り紙等で調査協力を呼びかけ、別室にて1～4名の少人数にて質問紙調査を実施した。

調査内容：

- (1) 卒業論文作成の重要性、深刻性、ストレス度：橋本(2011)を参考に、「卒業論文を作成することは、あなたにとってどのくらい重要な(深刻な/ストレスを感じる)できごとでしたか」に7件法で答えてもらった(1点：「全然重要でない」～7点：「非常に重要である」)。
- (2) 卒業論文作成後の状況に対する認知：橋本(2004)が作成した卒業論文作成状況に対する認知尺度の項目をもとに、卒業論文作成後にあてはまらない1項目を削除し、さらに項目内容を卒業論文作成直後の状況にあてはまるように修正した11項目を設定した。「卒業論文をめぐる自分自身や周りの状況に対して、次のような考えをどのくらいしていますか」に7件法で答えてもらった(1点：「全然あてはまらない」～7点：「非常にあてはまる」)。これは、卒業論文作成に対して肯定的な認知をしているほど得点が高くなるように得点化される。
- (3) 卒業論文作成の楽しかった面と苦しかった面、その対処法：橋本(2011)を参考に、「あなたにとって、卒業論文作成のどのような面が楽しかったですか」、「あなたにとって、卒業論文作成のどのような面が苦しかったですか」、に新たにストレスへの対処方法として「卒業論文作成で苦しかったことに対し、あなたはどのように対処してきましたか」を独自に加え、教示を行い自由記述を求めた。
- (4) 卒業論文作成において学んだこと、体験したこと：「卒業論文作成で、あなたはどのようなことを学びましたか」、「卒業論文作成は、あなたにとってどのような体験でしたか」の教示を行い、自由記述を求めた。
- (5) 自尊感情：Rosenberg(1965)による自尊感情尺度の日本語版(山本・松井・山成, 1982), 10項目5件法を使用した。この尺度は、得点が高いほど自己全体を肯定的にとらえ、自己を高く評価しているとされる。

調査2

目的

卒業論文を指導した教員が、学生にとって卒業論文作成がどの程度の重要性、深刻性、ストレスを与えるものと考えられているのかを調査する。また、卒業論文作成において、学生にとってどのようなことが楽しく苦しいのか、どのような体験だと思えるか、また学生には、苦しい時にどのように対処してほしいと思うか、何を学んでほしいか、について調査する。

方法

対象者：教員7名、平均年齢47.57歳($SD=9.86$)。

調査時期：2012年12月20日～2013年1月19日

調査手続き：心理学を専攻する学生の卒業論文指導を行う教員に調査協力を呼びかけ、任意で個別に質問紙調査を実施した。

調査内容：

- (1) 学生にとっての卒業論文作成の重要性、深刻性、ストレス度：橋本(2011)を参考に、「卒業論文を作成することは、学生にとってどのくらい重要な(深刻な/ストレスを感じる)できごとだと思えますか」(下線は、学生対象の場合と異なる文言を表す。以下同様)に7件法で答えてもらった(1点：「全然重要でない」～7点：「非常に重要である」)。
- (2) 学生にとって卒業論文作成の楽しい面と苦しい面、その対処法：橋本(2011)を参考に、「学生にとって、卒業論文作成のどのような面が楽しかったと思えますか」、「学生にとって、卒業論文作成のどのような面が苦しかったと思えますか」に新たにストレスへの対処方法として「卒業論文作成で苦しかったことに対し、学生にはどのように対処してほしいですか」を独自に加え、教示を行い、自由記述を求めた。
- (3) 学生が卒業論文作成において学んだこと、体験したこと：「卒業論文作成で、学生にはどのようなことを学んでほしいですか」、「卒業論文作成は、学生にとってどのような体験であると思えますか」の教示を行い、自由記述を求めた。

結果と考察

1. 卒業論文作成の重要性, 深刻性, ストレス度【学生, 教員】

学生が感じている卒業論文作成における重要性, 深刻性, ストレス度について, 学生と教員の平均得点を算出し t 検定にて比較した結果, 両者に差はみられなかった (Table 1)。

橋本 (2004, 2011) と同じく, いずれも中央値の4点を大きく上回った得点であり, 学生にとって, 卒業論文が重要なものと認識されていることがわかった。また, 学生にとっての卒業論文作成に対する重大さや大変さが教員にも共有されており, 教員はそれらを踏まえた上で指導を行っていることが考えられた。

Table 1 学生と教員の卒業論文作成における重要性, 深刻性, ストレス度の平均値 (標準偏差) と t 検定結果

	重要性	深刻性	ストレス度
学生 (n=35)	6.17 (0.95)	5.80 (1.32)	5.69 (1.41)
教員 (n=7)	6.29 (1.11)	5.43 (1.13)	5.71 (0.49)
t 値	-0.28	0.69	-0.10

2. 卒業論文作成と自尊感情との関連【学生】

卒業論文作成状況に対する認知尺度11項目に対して因子分析 (重み付けのない最小2乗法, プロマックス回転) を行い, 固有値の減衰状況 (2.88, 1.78, 1.47, 1.26, 1.01…) から1因子構造が妥当であると判断した。そこで, 因子負荷量 .35以下の項目を除き, 最終的に卒業論文作成状況に対する認知尺度として6項目を採用した (Table 2)。なお, 信頼性検討のための Cronbach の α 係数は .71 とほぼ十分な内的整合性を有しており, 信頼性が確認された。6項目の合計平均得点は26.49 ($SD=6.31$) であった。

次に, 大学生の自尊感情尺度の合計平均得点を算出したところ, 30.89 ($SD=8.10$) であった。卒業論文作成における重要性・深刻性・ストレス度, 卒業論文作成状況に対する認知 (6項目), 自尊感情との関連を, 相関分析を用いて検討した (Table 3)。その結果, 重要性と深刻性との間に中程度の正の相関 ($r=.517, p<.01$) が示され, ストレス度と自尊感情との間に弱い負の相関 ($r=-.295, p<.10$) が見られる傾向が示された。また, 卒業論文作成状況に対する認知と自尊感情との間に中程度の正の相関 ($r=.446, p<.01$) が示された。

Table 2 卒業論文作成に対する認知尺度 (重み付けのない最小2乗法)

項目	因子負荷量
私はよい卒業論文を書き上げられたと思う	.918
卒業論文を作成することは私を人間的に成長させる機会であったと思う	.700
卒業論文は私の糧になったと思う	.593
テーマの設定がこれでよかったのかどうか自信がなかった (※)	.437
卒業論文を私の努力で完成させることができたと思う	.392
卒業論文を書かなくても卒業できる大学の人がうらやましかった (※)	.389
	因子寄与率 36.35%

(※は逆転項目)

Table 3 卒業論文作成における重要性, 深刻性, ストレス度, 卒業論文作成に対する認知, 自尊感情との関連

	重要性	深刻性	ストレス度	卒業論文作成認知	自尊感情
重要性	1.000	.517 **	.151	.215	-.009
深刻性		1.000	.265	.093	-.032
ストレス度			1.000	-.167	-.295 +
卒業論文作成認知				1.000	.446 **
自尊感情					1.000

** $p<.01$, + $p<.10$

これらより、卒業論文の作成をより重要だと捉えるほど、その取り組みに深刻さが増すことが考えられた。また、卒業論文作成過程において、自尊感情の程度がストレス度に関連していることがわかった。外山・桜井(1998)は大学生を対象とした調査において、自尊感情が出来事の認知的評価に大きく影響する個人的特性である可能性を示している。また、ストレス反応および抑うつ傾向に対し自尊感情による軽減効果が認められ、そのほとんどが直接効果であったことを示している(外山・桜井, 1998)。この知見を本研究に当てはめるなら、個人の持っている自尊感情の程度が高いほど、卒業論文の作成をあまりストレスと感じなくさせ、ストレスを軽減させているとも考えられる。しかし同時に、卒業論文に対するストレスが低いことが自尊感情を高めている可能性もあり、この点に関しては今後より詳細に検討することが必要である。橋本(2011)は、大学4年生の7月と12月時点での、卒業論文作成状況における認知尺度の各項目と抑うつとの関連を比較し、12月時には期限に対する不安感、卒業論文を書かない学生への羨望というネガティブな認知が増すことを示唆している。本研究では、卒業論文に対する肯定的な認知と自尊感情が関連していた。このことより、卒業論文作成が自分の糧となり、自分を成長させる機会となったと捉えている学生は、等身大の頑張りを認め、自分なりの満足も得ていると考えられる。

3. 卒業論文作成に関する自由記述【学生、教員】

卒業論文作成に関する自由記述の分析には、KJ法(川喜田, 1967)を用いた。まず最初に、自由記述に記載してある内容を意味単位ごとに区切り、カードに転記した。その後、内容の上でお互いに類似しているものをまとめて小グループとして分類し、具体的に内容を表すグループ名をつけた。その際、どこにも入らないカードはそのまま残した。また同様の手続きで小グループ同士を編成し、先ほどの残存しているカードも含めさらに大グループに分類し、グループ名をつけた。KJ法による分類は、筆者と心理学を専攻する大学院生1名とで行い、その一致率は80.14%であった。不一致の項目については合議の上、最終決

定を行った。回答内容をまとめたものをTable 4～Table 8に示す。なお表は、「その他」を除いて出現率の高いものから順に記載し、大グループ、小グループの見出しの下に記載してある数値は記述数(全回答数における割合)を表す。

(1) 卒業論文作成の楽しかった面

大学生における卒業論文作成の『楽しかった面』について、大学生35名から45個の回答が得られ、そのうち41個が「研究の実施」、「新しい知識の獲得」、「興味あることへの取り組み」、「文章作成」、「自分らしさの発揮」、「調査方法の立案」、「仲間との関わり」の7つの小グループに分類された。その後さらに残りの4個(表では「その他」として記述。以下同様)も含め<卒業論文作成に直接関わること>、<卒業論文作成に伴うこと>の2つの大グループに分類された(Table 4-1)。一方、指導教員が考える卒業論文作成の『楽しかった面』について、教員7名から17個の回答が得られ、そのうち14個の回答が「仲間や指導教員との関わり」、「達成感を得る」、「興味あることへの取り組み」、「研究の実施」の4つの小グループに分類された。その後さらに残りの3個も含め<卒業論文作成に伴うこと>、<卒業論文作成に直接関わること>の2つの大グループに分類された(Table 4-2)。

まず、学生の回答の84.4%が、<卒業論文作成に直接関わること>を楽しかった面として挙げていたことについて、教員が想像している以上に、学生にとっては、初めて行う「研究の実施」(24.4%)や「新しい知識の獲得」(22.2%)を楽しんでいることが示されていた。これらの回答は、橋本(2011)の示した内容を概ね支持していた。しかし、本研究で新たに示された回答として、3番目に多く見られた「興味あることへの取り組み」(17.8%)がある。これは、卒業論文作成の全行程を振り返った時に改めて気づかれるものであり、卒業論文作成中や提出直前には意識されにくいことだと考えられる。先述の尾崎・松島(2006)のように、実際に卒業論文に着手する前からそれを意識し楽しみにしていたことも窺われる。一方、教員の回答の半数以上(58.8%)が、卒業論文を完成させることそのものよりも、卒業論文作成に伴う仲間や指導教員との関わりや達成

感を学生が楽しんでいると考えているものであった。このうち「達成感を得る」(23.5%)は、学生の回答には見られず、学生にとっては、達成感を得ることと楽しいことが、また別のものとして経験されていることが考えられる。

(2) 卒業論文作成の苦しかった面およびその対処法

大学生における『苦しかった面』では54個の回

答が得られ、そのうち49個が「研究の実施」, 「文章作成」, 「予定通り進まない」, 「テーマ決め」, 「考察」, 「時間的問題」, 「指導教員との関わり」の7つの小グループに分類された。その後さらに残りの5個も含め、<卒業論文作成に直接関わること>, <卒業論文作成に伴うこと>の2つの大グループに分類された (Table 5-1)。一方、指導教員が考える『苦しかった面』では14個の回

Table 4-1 学生における卒業論文作成の『楽しかった面』に関する記述の分類結果

大グループ	小グループ	記述例	記述数 (%)
卒業論文作成に直接関わること 38 (84.4)	研究の実施 11 (24.4)	何らかの結果が得られた	3 (6.7)
		実験をしたこと	2 (4.4)
		データ分析	2 (4.4)
		思っていたような結果が出た	2 (4.4)
		予想外の結果が出た	2 (4.4)
	新しい知識の獲得 10 (22.2)	調査を通しいろいろな考えを知った	5 (11.1)
		多くの本や論文を読んだ	3 (6.7)
		これまで知らなかったことを経験できた	2 (4.4)
	興味あることへの取り組み	興味あることを研究できた	8 (17.8)
		文章作成	2 (4.4)
自分の考えをうまく文章化できた		1 (2.2)	
自分で書いた文章にOKが出た		1 (2.2)	
自分らしさの発揮 2 (4.4)	自分のオリジナリティが発揮される	1 (2.2)	
	全て自主的に行えたこと	1 (2.2)	
調査方法の立案	考えを計画し形にする	2 (4.4)	
	その他	1 (2.2)	
	他者より早く出来上がった	1 (2.2)	
卒業論文作成に伴うこと 7 (15.6)	表の作成	1 (2.2)	
	仲間との関わり	ゼミの仲間と一緒に頑張った	5 (11.1)
	その他	悩みや疑問が解決した	1 (2.2)
	2 (4.4)	楽しいと感じなかった	1 (2.2)
合計			45 (100.0)

Table 4-2 指導教員が考える、学生にとって卒業論文作成の『楽しかった面』に関する記述の分類結果

大グループ	小グループ	記述例	記述数 (%)
卒業論文作成に伴うこと 10 (58.8)	仲間や指導教員との関わり 5 (29.4)	ゼミでのディスカッション	3 (17.6)
		指導教員とのやりとり	1 (5.9)
		仲間と協力して一つのことを仕上げる作業	1 (5.9)
	達成感を得る 4 (23.5)	頑張った後得られる達成感	2 (11.8)
		疑問が明らかになった何とも言えない成功体験	1 (5.9)
卒業論文作成に直接関わること 7 (41.2)	その他	自分の関心あることを最初から最後まで自分の力で取り組み、仕上げて行く	1 (5.9)
		学問の面白さを知る	1 (5.9)
	興味あることへの取り組み 3 (17.6)	自分で興味を持ったテーマを掘り下げて取り組める	2 (11.8)
	研究の実施 2 (11.8)	個人的に感じていた疑問に取り組み解決できる	1 (5.9)
		立案・実施・解釈など	1 (5.9)
その他 2 (11.8)	実際に研究を行えること	1 (5.9)	
	新しい知識の獲得	1 (5.9)	
書き上げる期待感			1 (5.9)
合計			17 (100.0)

答が得られ、そのうち11個が「研究方法の確立」, 「文章読解と作成」, 「予定通り進まない」, 「指導教員との関わり」の4つの小グループに分類された。その後さらに残りの3個も含め、＜卒業論文作成に直接関わること＞, ＜卒業論文作成に伴うこと＞の2つの大グループに分類された (Table 5-2)。

卒業論文の苦しかった面として、学生の72.7%が＜卒業論文作成に直接関わること＞を挙げており、その内「研究の実施」が24.1%ともっとも多く、これは『楽しかった面』とも共通していた。その後「文章作成」(20.4%), 「予定通り進まない」(13.0%)と続いている。橋本(2011)に示

された、「どう評価されるかわからない」など評価に関わる内容は、本研究では見られなかった。反対に、「指導教員との関わり」(5.9%)は本研究で新たに見られた内容であり、これも全行程を通して改めて気づかれることなのだろう。また、研究の実施に関して、教員はそれを連続した行程のうちの一つとしてある程度大きなまとまりで捉えていることに対し、学生は、データ収集やデータ分析など一つ一つの行程を切り離して考え取り組み、各々に困難を感じている様子が窺えた。

次に、大学生における『苦しかったときの対処法』については65個の回答が得られ、そのうち60個が「相談する」, 「他者の力を借りる」, 「前向

Table 5-1 学生における卒業論文作成の『苦しかった面』に関する記述の分類結果

大グループ	小グループ	記述例	記述数 (%)	
卒業論文作成に直接関わること 39 (72.2)	研究の実施 13 (24.1)	データが多く処理が大変だった	5 (9.3)	
		データ分析	3 (5.9)	
		思ったような結果が出ない	3 (5.9)	
		データがなかなか集まらなかった	1 (1.9)	
		外部調査でのアポ取り	1 (1.9)	
	文章作成 11 (20.4)	文章にまとめること	10 (18.5)	
		文章での表現方法	1 (1.9)	
		予定通り進まない 7 (13.0)	計画通り進まない	4 (7.4)
			添削の度にたくさんの修正点が見つかる	3 (5.9)
			テーマ決め	テーマが決まらない
考察	考察すること	2 (3.7)		
卒業論文作成に伴うこと 15 (27.8)	その他 2 (3.7)	自主的に行わなくてはならない	1 (1.9)	
		調査方法を考える	1 (1.9)	
	時間的問題 9 (16.7)	期限に間に合わせること	5 (9.3)	
		他との両立など時間的制約がある	4 (7.4)	
	指導教員との関わり	指導教員との連携がうまくいかない	3 (5.9)	
		その他 3 (5.9)	発表に向けて準備する	1 (1.9)
			正しいのかわからず悩む	1 (1.9)
		全て	1 (1.9)	
合計			54 (100.0)	

Table 5-2 指導教員が考える、学生にとって卒業論文作成の『苦しかった面』に関する記述の分類結果

大グループ	小グループ	記述例	記述数 (%)
卒業論文作成に直接関わること 9 (64.3)	研究方法の確立	興味のあることを研究に乗せていくこと	3 (21.4)
	文章読解と作成 3 (21.4)	論理的な文章を書くこと	2 (14.3)
		専門性の高い文章を理解すること	1 (7.1)
	予定通り進まない その他	行き詰まって思うように進まない	2 (14.3)
		研究の中でオリジナリティを発揮すること	1 (7.1)
卒業論文作成に伴うこと 5 (35.7)	指導教員との関わり	指導教員の要求への対処	3 (21.4)
		その他 2 (14.3)	長時間の集中
			就職活動との両立
合計			14 (100.0)

きな気持ちを持つ」, 「出来ることから取り組む」, 「一時卒論から離れる」, 「文献をあたる」の6つの小グループに分類された。その後さらに残りの5個も含め, <他を頼る>, <自分で解決する>の2つの大グループに分類された (Table 6-1)。また, 指導教員が期待する『苦しかったときの対処法』では15個の回答が得られ, そのうち13個が「自分なりに努力し乗り越える」, 「研究に対する姿勢を身につける」, 「相談する」の3つの小グループに分類された。さらに残りの2個も含め <自分で解決する>, <他を頼る>の2つの大グループに分類された (Table 6-2)。

学生は, 53.8%が他者への相談や周囲の協力を

求めるなど<他を頼る>内容を回答し, <自分で解決する> (46.2%) 内容を上回っていた。一方教員は73.3%の回答が<自分で解決する>内容であり, まずは学生自身で解決を試みてほしいと期待していることがわかった。先の『苦しかった面』について, 「指導教員との関わり」に関する内容の回答は, 学生で5.9%, 教員で21.4%であったことから, 教員はこの不一致をある程度認識しているのかもしれない。この結果から, 卒業論文を作成するにあたりソーシャルサポートを確保できるような環境が整っていることが, 学生の卒業論文作成に対する不安や行き詰まり感を和らげることにつながると考えられる。このような周囲に

Table 6-1 学生における卒業論文作成の『苦しかったときの対処法』に関する記述の分類結果

大グループ	小グループ	記述例	記述数 (%)	
他を頼る 35 (53.8)	相談する 28 (43.1)	指導教員に相談する	15 (23.1)	
		友人などに相談する	13 (20.0)	
	他者の力を借りる 6 (9.2)	周りの協力を求める	4 (6.2)	
		指導教官に添削してもらう	2 (3.1)	
	その他	祈る	1 (1.5)	
自分で解決する 30 (46.2)	前向きな気持ちを持つ 9 (13.8)	逃げずに取り組む	4 (6.2)	
		自分を鼓舞する	5 (7.7)	
	出来ることから取り組む 8 (12.3)	ひたすら文章を書いてみる	5 (8.1)	
		様々な統計方法を試す	1 (1.5)	
		不備に気づいたらすぐに直す	1 (1.5)	
	一時卒論から離れる 6 (9.2)	出来るときに出来ることをやる	1 (1.5)	
		気分転換する	4 (6.2)	
	文献をあたる 4 (6.2)	休む	他の論文を参考にしたり, 文献を読む	2 (3.1)
			自分の中で期限を決めて頑張る	3 (4.6)
		その他	実習が終わってから一気にやる	1 (1.5)
自分のスケジュールをなるべく空けておく			1 (1.5)	
他の時間を削る			1 (1.5)	
合計			65 (100.0)	

Table 6-2 指導教員が期待する卒業論文作成の『苦しかったときの対処法』に関する記述の分類結果

大グループ	小グループ	記述例	記述数 (%)
自分で解決する 11 (73.3)	自分なりに努力し乗り越える 5 (33.3)	自分なりに考えて乗り越える	3 (20.0)
		苦しいことが何か自分で考え, それを解決する術を試す	2 (13.3)
	研究に対する姿勢を身につける 4 (26.7)	あらかじめ研究に対する心構えを持っておく	2 (13.3)
		柔軟さと頑固さを携える	2 (13.3)
	その他	研究のおもしろさを感じる	1 (6.7)
他を頼る 4 (26.7)	相談する 4 (26.7)	とにかく前向きに取り組む	1 (6.7)
		指導教員に相談する	3 (20.0)
		仲間に相談する	1 (6.7)
合計			15 (100.0)

相談できる研究環境を準備しておくことも、教員にとって今後の卒業論文指導における課題の一つとして挙げられるだろう。

(3) 卒業論文作成で学んだこと

大学生における『学んだこと』について57個の回答が得られ、そのうち48個が「論文の作成行程」、「論文作成や研究の難しさ」、「研究の進め方」、「新たな知識や理解を得る」、「研究の意義」、「周囲の人への感謝」、「コミュニケーションの大切さ」、「完成させる喜びや達成感」の8つの小グループに分類された。さらに残りの9個も含め、卒業論文作成に直接関わること、卒業論文作成に伴うことの大グループに分類された (Table 7-1)。一方、指導教員が期待する『学んでほしいこと』では26個の回答が得られた。まず、「論文の作成行程」、「研究の意義」、「研究の進め方」、「研究に対する姿勢」、「諦めずやり遂げる精神」、「思考力を身につける」の6つの小グループに分類され、それらはさらに卒業論文作成に直接関わること、卒業論文作成に伴うことの大グループに分類された (Table 7-2)。

学生と教員に共通する回答として、「論文の作成行程」(学生：19.3%；教員：23.1%)、「研究の進め方」(学生：10.5%；教員：15.4%)、「研究の意義」(学生：3.5%；教員：19.2%)が見られた。ただし、「研究の意義」については、その学びに対する認識や期待の程度が両者の間で異なり、学生が認識しているよりも、教員の期待がより強いことが示されていた。また、学生に特徴的なものとして、「論文作成や研究の難しさ」(15.8%)に関する回答が見られ、卒業論文に実際取り組んでみると、着手する以前に思っていたよりも大変であった実感が込められているようであった。さらに10.5%の学生の回答が、周囲の人のありがたさを学んだことであり、これらの思いも、卒業論文作成における大きな支えとなったと考えられる。一方、学生に『学んでほしいこと』に関する教員7名の回答数は26個であり、一人当たり平均3.71個であった。他の質問項目に比較し回答数が多いことから、教員が学生に対し、卒業論文作成を通してより多くのことを学んでほしいと期待していることが考えられる。また教員は学生に、文章作成や問題意識の持ち方などだけでなく、「研究に

対する姿勢」(15.4%)を学ぶことも期待していた。これは、「諦めずやり遂げる精神」(15.4%)や「思考力を身につける」(11.5%)などと共に、卒業論文作成場面に留まらず、今後社会に出てからも必要となる姿勢あるいは態度に繋がるものであろう。しかし調査の結果を見る限り、それは学生の回答には見られず、このような教員の期待は、学生には実際なかなか伝わりづらく、すぐには実感されにくいものであることが推測される。

(4) 卒業論文作成で体験したこと

大学生における『体験したこと』では56個の回答が得られ、そのうち53個が「良い体験」、「自己成長できる」、「貴重」、「大学生生活の集大成」、「達成感を得られる」、「知識が深まる」、「周囲に対し感謝できる」、「楽しい体験」、「嫌な体験」、「楽しくもあり苦しくもある」の10の小グループに分類された。さらに残りの3個も含め、肯定的な捉え方、否定的な捉え方、その他の大グループに分類された (Table 8-1)。一方、指導教員が考える『体験したこと』では15個の回答が得られ、そのうち10個が「自己成長できる」、「貴重」、「大学生生活の集大成」、「達成感を得られる」、「自分自身を知る」の5つの小グループに分類された。さらに残りの5個も含めて肯定的な捉え方、その他の大グループに分類された (Table 8-2)。

学生の76.8%、教員の73.3%の回答が、卒業論文作成について肯定的な体験だと捉えていた。その中でも、「自己成長できる」(学生：14.3%；教員：13.3%)、「大学生生活の集大成」(学生：10.7%；教員：13.3%)、「達成感を得られる」(学生：8.9%；教員：13.3%)が共通した回答であった。学生には、「大変だったが良い体験だった」、「苦しんだ分自分の成長につながった」、「苦しくて大変だったが達成感を得た」など、大変な作業で苦しかったからこそ、それを乗り越えた時の喜びが大きく自分の成長を実感できているとする、苦しい体験も肯定的に意味付けされている様子が見られた。また、学生にとって達成感が、『楽しかった面』ではなく『体験したこと』で見られたことから、卒業論文作成における達成感とは、一時的に楽しいこととしての思い出というよりもむしろ、作成行程全体を通して少しずつ積み重ねら

Table 7-1 学生における卒業論文作成で『学んだこと』に関する記述の分類結果

大グループ	小グループ	記述例	記述数 (%)
卒業論文作成 に直接関わる こと 37 (64.9)	論文の作成行程 11 (19.3)	文章の書き方	6 (10.5)
		統計方法	3 (5.3)
		データ収集	1 (1.8)
		表やグラフの作成	1 (1.8)
	論文作成や研究の難しさ 9 (15.8)	考えをまとめ伝えることの難しさ 研究を行うことの難しさ 論文を書く大変さ	4 (7.0)
			3 (5.3)
			2 (3.5)
	研究の進め方 6 (10.5)	計画性の大切さ 自主的に進めることの大切さ	4 (7.0)
			2 (3.5)
	新たな知識や理解を得る 研究の意義	専門分野の知識を得た 研究を行うことの大切さ	4 (7.0)
			2 (3.5)
	その他 5 (8.8)	研究の楽しさ なかなか体験できない実験を行った 学ぶ姿勢 調査実施時の心得 どこに重点を置くか考える	1 (1.8)
			1 (1.8)
			1 (1.8)
1 (1.8)			
1 (1.8)			
卒業論文作成 に伴うこと 20 (35.1)	周囲の人への感謝	指導教員や友達, 家族のありがたさを知った	6 (10.5)
	コミュニケーションの大切 さ 6 (10.5)	指導教官との連携	3 (5.3)
		他者とのコミュニケーション	2 (3.5)
		聞く姿勢	1 (1.8)
	完成させる喜びや達成感 4 (7.0)	一つのことを最後までやり抜いた時の達成感 自分の論文が完成した時の喜び	2 (3.5)
			2 (3.5)
	その他 4 (7.0)	息抜きも大切 人生思い通りにはいかない 時間の大切さ 自分自身についての理解も得られた	1 (1.8)
			1 (1.8)
1 (1.8)			
合計			57 (100.0)

Table 7-2 指導教員が期待する卒業論文作成で『学んでほしいこと』に関する記述の分類

大グループ	小グループ	記述例	記述数 (%)
卒業論文作成 に伴うこと 7 (26.9)	論文の作成行程 6 (23.1)	論理的に述べること	3 (11.5)
		文章の書き方	2 (7.7)
		調べ, まとめる術	1 (3.8)
	研究の意義 5 (19.2)	正しいプロセスを踏むことで, わからな いなりに一応の結論が出る 研究で一つのことをやり遂げる充実感 研究することの面白さ 研究を行うことの意義	2 (7.7)
			1 (3.8)
			1 (3.8)
			1 (3.8)
			1 (3.8)
	研究の進め方 4 (15.4)	テーマ決定にいたる問題意識の持ち方 限られた時間内に必要十分な作業をこな すプランニング力 疑問について多方面からのアプローチ	2 (7.7)
			1 (3.8)
			1 (3.8)
	研究に対する姿勢 4 (15.4)	研究に対する責任感 研究における姿勢は他の仕事にも共通する	3 (11.5)
			1 (3.8)
	諦めずやり遂げる精神 4 (15.4)	与えられた課題を頑張って乗り越えやり遂げる 一つのことをやり遂げる大変さ	3 (11.5)
1 (3.8)			
2 (7.7)			
思考力を身につける 3 (11.5)	深く掘り下げ考える力 考え, 答えを出していく力	1 (3.8)	
		1 (3.8)	
合計			26 (100.0)

Table 8-1 学生における卒業論文作成で『体験したこと』に関する記述の分類結果

大グループ	小グループ	記述例	記述数 (%)
肯定的な捉え方 43 (76.8)	良い体験 9 (17.0)	大変だったが良い体験だった	5 (8.9)
		良い体験だった	3 (5.4)
		またやりたいと強く思う	1 (1.8)
	自己成長できる 8 (14.3)	力や自信がついた	5 (8.9)
		苦しんだ分自分の成長につながった	2 (3.6)
		大変だったが頑張った	1 (1.8)
	貴重 7 (12.5)	貴重な体験	6 (10.7)
		自分では進んで挑戦しないことに取り組めた	1 (1.8)
	大学生生活の集大成 6 (10.7)	学生らしい最後の集大成	5 (8.9)
		学生生活の締めくくりとして有意義	1 (1.8)
達成感を得られる 5 (8.9)	苦しくて大変だったが達成感を得た	3 (5.4)	
	達成感を得た	2 (3.6)	
知識が深まる 周囲に対し感謝できる	色々知ることが出来てよかった	3 (5.4)	
	周囲の温かさを強く感じた	3 (5.4)	
	楽しい体験	2 (3.6)	
否定的な捉え方 7 (12.5)	嫌な体験 7 (12.7)	大変でつらい	5 (8.9)
		もうやりたくない	2 (3.6)
その他 6 (10.7)	楽しくもあり苦しくもある	研究の楽しさと苦しさの両方を知った	3 (5.4)
	その他 3 (5.4)	他の人とたくさん話す	1 (1.8)
		困難を1つずつクリアしていくことが大切	1 (1.8)
		自分の意志だけでは進められない	1 (1.8)
合計			56 (100.0)

Table 8-2 指導教員が考える、学生が卒業論文作成で『体験したこと』に関する記述の分類結果

大グループ	小グループ	記述例	記述数 (%)
肯定的な捉え方 11 (73.3)	自己成長できる	様々なことに気づき、大変なことを何とか乗り越え成長できる機会	2 (13.3)
		貴重	自分と向かう貴重な体験
	大学生生活の集大成 2 (13.3)	問題や関心を大学4年間で学んだことを総動員で追求する壮大なドラマ	1 (6.7)
		テーマ探し、文献講読、疑問を多角的視点で考え言葉で紡いで行く壮大なドラマ	1 (6.7)
	達成感を得られる 2 (13.3)	達成感の味わえる体験	1 (6.7)
		一生に書く最も長い文章となる頑張った記念	1 (6.7)
	その他 3 (20.0)	周囲から叱咤激励され、自分が認められ受け入れられていると感じる	1 (6.7)
		学問のおもしろさに触れる	1 (6.7)
		仕事や人生で役立つ力をつける	1 (6.7)
	その他 4 (26.7)	自分自身を知る その他 2 (13.3)	自分の良い面も悪い面も知ることができる
難しい課題を乗り越え克服するという通過儀礼のようなもの			1 (6.7)
自分で責任を引き受ける			1 (6.7)
合計			15 (100.0)

れた結果として体験されていると思われる。

まとめと今後の課題

本研究では、学生・教員の両者から捉えた卒業論文作成における教育的意義を検討することを目的に、1) 大学生の卒業論文作成に対する認識と、その自尊感情との関連を調査し、2) 卒業論文作成について、学生と指導する教員の捉え方、および両者の考え方の共通点と相違点を検討した。結果、学生にとって、卒業論文が重大なものと認識されており、卒業論文の作成をより重要だと捉えるほど、その取り組みに深刻さが増すことが考えられた。そして、学生にとっての卒業論文作成に対する重大さや大変さは、教員にも共有されていた。また自尊感情との間に、卒業論文作成過程のストレス度と負の相関がみられる傾向、卒業論文に対する肯定的な認知と正の相関が示された。Rosenberg (1965) は、自尊感情が高いことが、自分の限界を知り成長を期待することでもであると述べている。調査の結果から、自尊感情の高さが出来事の認知的評価に影響している(外山・桜井, 1998) ことと、卒業論文作成をストレスと感知することが自尊感情の低下につながり、自分を成長させる機会であり糧になったと思えることが自尊感情を高めることになることの両方が考えられる。この点に関しては、今後より詳細に検討することが必要だろう。

卒業論文作成に関する自由記述から、多くの学生が、初めて行う研究の実施や、新しい知識の獲得を『楽しかった面』に挙げていた。また、自分の興味のあることを研究できることを純粋に喜んでいる姿も窺われた。同時に、研究の実施は『苦しかった面』においてももっとも多く挙げられていた。一方教員は、卒業論文の完成に直接関わる事柄よりも、一年以上を共にする仲間や指導教員との関わりや、完成に伴い達成感を得ることなどを、より多く、学生にとって楽しかったと思われることとして挙げていた。これらより、教員は、全体を俯瞰して指導にあたるが、学生は卒業論文の作成過程の全体像を把握しにくく、見通しが持ちにくいことが考えられる。学生にとっては、卒業論文を提出することがまず大事で、一連のプロセスとしての学びにまでは思いが及ばないことも

あるのかもしれない。さらに、苦しかったことへの対処として、学生の半数以上が他者への相談や周囲の協力を求めるなど、他を頼ると回答していたが、教員は、まずは自分なりに努力し、学生自身で解決を試みることを期待していた。この点における両者の考えの食い違いが、一年以上掛けて取り組む作業の中で少しずつ作業自体への負担感を増す要因となっていることも十分考えられる。先に述べたように、学生にとって卒業論文作成全体の見通しが持ちにくい状況があるとすれば、教員には、事前に学生のレディネスを確認し、その状況に応じ適宜研究の全体像を示しながら指導を行うことが求められるだろう。

卒業論文作成を通して、学生が『学んだこと』と、教員が『学んでほしいこと』で共通して見られた回答は、文章の書き方などの論文の作成行程、研究の進め方、研究の意義などであった。また、学生は、周囲の人への感謝やコミュニケーションの大切さなど、他者との関わりを改めて学んだと答えている。一方、教員は学生に、研究に対する姿勢や、諦めずやり遂げる精神などを期待していた。道田(2003)は、大学1年時に読んだ文章と同じ文章を大学4年時に読ませ、インタビュー調査の結果、考え方の変化に影響した事項として、卒業論文の影響を挙げる人が多かったと述べている。また、廣岡・横矢・中西(2006)は、大学4年生を対象に調査を行い、考えさせられる授業やゼミなどの少人数課題探求型の授業を受けることが、「適切な基準や根拠に基づく、論理的で偏りのない思考(廣岡・小川・元吉, 2000)」であるクリティカルシンキング志向性を高める可能性が高いことを明らかにしている。本研究でも、ゼミの仲間と共に学び合う中で、お互いの学びを深め合っている姿が窺われた。さらに卒業論文作成に関し、多くの学生と教員が、肯定的な体験であったと回答していた。その中でも、自己成長できる体験、大学生活の集大成、達成感を得られる体験との回答が両者に共通して見られた。一方で学生の回答の中には、「大変でつらい」、「もうやりたくない」といった嫌な体験とする否定的な回答もあったが、「大変だったが良い体験だった」、「苦しんだ分自分の成長につながった」など、大変な作業で苦しかったからこそ、それを乗り越えた時

に自分の成長を実感できている様子も表されていた。

このように、学生にとって卒業論文作成とは、それに直接関わる各々の作業を学ぶだけでなく、研究の実施が思うように進まない時にも、ゼミの仲間や指導教員とやり取りを行いながら学びを深め、達成感を得て、自己成長を実感できるものとして体験されることが示唆された。そして同時に、卒業論文指導を通して、教員が自分自身の研究に対する姿勢を問われることも多く、学生と共に教員も学んでいる側面があるだろう。これらが、卒業論文作成における教育的意義の、大事な側面の一つを表していると言える。

本研究では、卒業論文作成に関する教育的意義を検討するための貴重なデータを得たが、全体の調査対象者の数が十分でなかった問題が挙げられる。また、心理学を専攻している学生とその指導教員のみを対象としたが、専攻が異なるとまた違った様相を呈することも十分考えられる。調査時期や使用した卒業論文作成に関する尺度の妥当性についても、さらなる吟味が必要だろう。さらに、卒業論文作成の過程に自尊感情がどのように関わっているのか、明確な検討にまでは至らなかった。よって今後は、調査対象者の数を増やし、卒業論文作成着手から終了時に至るまで縦断的に、卒業論文作成の認知と自尊感情との関連についてより詳細な検討を行うことが必要である。

謝辞

本論文を作成するにあたり、調査に参加してくださった学生および教員のみなさまに心から感謝申し上げます。

文献

橋本京子 (2004) 卒業論文作成時におけるポジティブ幻想の現れ方と精神的健康の関係について 京都大学大学院教育学研究科紀要, 50, 265-276.
 橋本京子 (2011) 大学生の卒業論文作成時の自己認知、および卒業論文作成状況に対する認

知に関する実証的検討 —卒業論文作成によって生じるストレスの側面から— 京都大学大学院教育学研究科紀要, 57, 489-502.
 廣岡秀一・小川一美・元吉忠寛 (2000) クリティカルシンキングに対する志向性の測定に関する探索的研究 三重大学教育学部研究紀要, 57, 教育科学, 121-133.
 廣岡秀一・横矢規・中西良文 (2006) 大学生のクリティカルシンキング志向性と大学生生活経験 三重大学教育学部研究紀要, 51, 教育科学, 161-173.
 川喜田二郎 (1967) 発想法 創造性開発のために 中公新書
 吉良安之・田中健夫・福留留美 (2007) 学生相談来談者の学年ごとの問題内容と学生期の諸課題, 学生相談研究, 28, 1-13.
 道田泰司 (2003) 大学生の思考は何によって影響を受けるか? 琉球大学教育学部紀要, 62, 147-153.
 水間玲子 (2006) 大学生のアイデンティティ発達における専門教育の意義について —心理学専攻の学生を対象に— 京都大学高等教育研究, 12, 1-14.
 尾崎仁美・松島るみ (2006) 大学生の授業意欲の変化とその要因 京都ノートルダム女子大学生涯発達心理学研究誌プシユケー, 5, 63-73.
 Rosenberg, M. (1965) *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
 外山美樹・桜井茂男 (1998) 大学生における自尊感情、日常的出来事、およびストレス反応の関係 筑波大学心理学研究, 20, 125-133.
 田中俊也・山田嘉徳・加戸陽子 (2011) 「卒業論文に対する態度」尺度 (SAG41) の構成 文学部心理学論集, 関西大学文学部心理学会, 5, 13-22.
 田澤実・梅崎修 (2011) 大学生活への意欲と達成が自尊感情に与える影響—大学1年生に対する縦断調査— 京都大学高等教育研究, 17, 65-71.
 山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982) 認知された自己の諸側面の構造, 教育心理学研究, 30 (1), 64-68.
 (2013. 2. 16受稿, 2013. 3. 22受理)

Educational significance in writing a graduation thesis: Students' self-esteem and teachers' expectations

Emi KODAMA

The purposes of this study were: 1) to examine the students' recognition for writing a graduation thesis, and its relation to self-esteem; and 2) to compare the differences in students' and teachers' thinking about writing a graduation thesis. The results showed that students recognized that writing a graduation thesis was serious, and the stress and positive recognition for it were related to self-esteem. Moreover, many students found writing a graduation thesis to be a positive experience. Additionally, they enjoyed studying itself and acquisition of new knowledge, and learned to communicate with other individuals. Regarding teachers, they expected the students to have sincere attitude toward their study and not to give up. The following was also suggested: that both students and teachers realized that writing a graduation thesis resulted in feelings of accomplishment and self-growth. And so, it is considered that it is the educational significance in writing a graduation thesis.

Key words: writing a graduation thesis, educational significance, self-esteem